



ご本山だより

大本山永平寺【紅葉】

大本山永平寺 ☎ 〇七七六・六三・三一〇二



霜月の永平寺は、赤や黄色の木の葉に彩られています。門前を流れる川は落ち葉を運び、そのせせらぎは体の奥深くに染み入ってまいります。そよ風に吹かれる楓の葉は、屋根瓦上に遊び、私たちにこの世の美しさと儚さを教えてくれているようです。永平寺では、この紅葉が落ち着きますと、これから

おとずれます風雪に備え、雪囲いをはじめます。雪囲いでは、皆が協力し合い、丸太を組み、竹簾を運び括り付け、それぞれにとのえてまいります。

さて、曹洞宗寺院の本堂には、よく達磨大師さまがお祀りされます。達磨大師さまといえますと、赤い衣です。まるで雪囲いをするが如くに、「被」という全身を覆う赤い衣を纏って坐禅をしています。その達磨大師さまのお師匠さまを般若多羅尊者といえます。

ある時、インドの王さまが般若多羅尊者を拝請しお斎を差し上げました。その際、般若多羅尊者は「文字ではないお経を誦むこと」についてこんなお言葉を残されております。

「入息陰界に居せず、出息衆縁に滞らず、常に如是経を転ずること、百千万億卷」

お経は、仏さまのおさとりを伝える大切なもの（文字）ですが、実にそのおさとりが顕れる仏道の現場は、私たち一人一人の足元（日常生活）に他ならないということです。永平寺においても、坐禅や托鉢、写経はもちろんのこと、雪囲いや落ち葉掃き、毎度の食事など、皆と共に過ごす生活そのものがおさとりの道場です。

永平寺を包む山々の紅葉の如くに、互いに生かし合い、和合して日々を過ごしていけたらと念じているものがあります。



ご本山だより 大本山總持寺

【だくじん独住だいしゅう第四世 中興ちゅうきよう】
石川素童いしかわそどう禪師

大本山總持寺 ☎〇四五・五八・六〇二一



紫雲臺に掲げられている石川素童禪師像（和田三造筆）

十一月二日から五日にかけて、總持寺を能登半島から横浜へ移すという大事業を成し遂げられた、中興・石川素童禪師の百回御遠忌法要を奉修いたします。

石川禪師は天保十二（一八四一）年名古屋のご出身で、誕生の甲子に因み、号を「牧牛」、諱を「素童」と称しました。

師席の泰増寺はじめ、彦根の清涼寺、東京の豪徳寺、小田原の最乗寺などの住職を経て、明治三十八年、六十四歳で總持寺貫首となり、翌年曹洞宗管長に就任されました。

開創以来能登に在った總持寺は明治三十一年に火災で焼失してしまいましたが、石川禪師は貫首になるや直ちに能登の再建と横浜鶴見への移転事業に取り掛かりました。そして明治四十四年十一月五日、山形県鶴岡市の總

持寺より移築された放光堂と虎嘯窟こしょうくつの竣工を機に遷祖式を挙げ、鶴見の地へ移転したのでした。

移転を見届けた禪師は大正九（一九二〇）年十一月十六日、世寿八十歳で遷化され、それから今年でちょうど百回忌を迎えます。

御遠忌期間中はご縁の深い焼香師さまによる報恩法要が営まれ、特に永平寺さまからも福山不老閣ふくさんふらうかく下と南澤副貫首老師の献香諷經法要が勤められます。

また、三日は境内を開放して「つるみ夢ひろば」が催されます。恒例の稚児行列に加え地元鶴見神社の万灯神輿と愛川町棟岩院の大御輿が参道から仏殿まで勇壮に練り歩きます。

總持寺の故郷・能登（輪島市）からもたくさんブースが出店されますので皆さまどうぞお参りください。

選・坊城俊樹

秋高しのの字のの字の鳶の舞

秋田県 小田嶋 恭葉

評

やはり愉快なのは「のの字のの字」である。
鳶が二、三羽ゆったりと上空を旋回するよう
すが描かれている。普通は「のの字」と言う
と、もっと身近にある物や動作の感じだが、こ
の雄大な飛翔の比喩というものに惹かれる。

梅雨入りや濃淡にじむ書道展

三重県 西村 廣視

評

梅雨に入ると、とたんに全てのものがじめ
めとしてくる。それを書道の文字のかすれた
濃淡に置き換えて表現した。その黒から灰色
へとにじむようなグラデーションと梅雨の灰
色の景色との比喩はみごと。

◆ 星にさへ生死のありて天の川

岐阜県 大下 雅子

◆ 献盃の後生ビール来るわ来るわ

静岡県 新美 まさじ

◆ 供ふればすぐに嘶く瓜の馬

秋田県 坂 一 草

◆ 先の世は知らず毛虫を焼きにけり

東京都 友野 瞳

◆ 福耳を寝め似顔絵師梅雨の中

千葉県 長澤 きよみ

◆ 青柿の一つ落ちたり音ひとつ

山口県 中井 清子

◆ 天涯に孤独を見たり瀧の音

岩手県 鈴木 道昭

◆ やはらかく母を諭せり流燈会

大阪府 柏原 才子

◆ 逆光に逆りけり花槐

群馬県 栗原 久美子

◆ 風鈴や世間話を囃しをり

島根県 俵 保恵

選者吟

ネツクレスの真珠と菊を供華として 俊樹

作句小見

墨東にある墓地の墓のひとつに吸い寄せられた。供華の
かわりにぼつんとイミテーションの真珠のネツクレスが菊とともに
供えられている。若くして亡くなった女性の墓なのだろう。切な
うさぎて言葉にならず、句の余韻に託してみた。

選・長澤ちづ

一撞きの鐘の名残の染みるごと六十路の
吾の心を詠まん

埼玉県 新井 巳喜雄

【評】余韻と共に心に染みわたる鐘の音、そんなふう
に人の心に届く歌を読みたいと詠う。誰しもそう願
いつつ上手くゆかないのが短歌の奥深さでもある。「六十路の吾の心」が六十路ならそれが出来そうと思わせてくれる。そこが面白い。

お勝手に母のかな文字シホとある壺より
小さじ一杯を取る

群馬県 小倉 太郎

【評】「シホ」の旧仮名遣いが、母の年齢を髣髴とさせ
世年期の入った壺を思い浮かべさせる力がある。下の句の作者の濃やかな行為は母への敬意にもつながり味わい深い。

◆ 急かされることの無き朝愛しみて窓の雨滴をただ眺め居り
静岡県 杉原 民子

◆ 復員の父は二人の子供等が懐かぬ苦勞を微笑み語る
広島県 小畑 宣之

◆ 週二度の漁じや身過ぎはきついよと相馬の沖をじつと見る漁夫
宮城県 須藤 智恵子

◆ 仮設出で元に戻るか他に行くか若者達の静かな議論
東京都 鈴木 正作

◆ 坊庭の棕の大樹の走り根を枕にしまへび眠りをるなり
三重県 西村 廣視

◆ 廃業の店舗のガラス戸闇深く壁に残りし赤き看板
広島県 徳永 進一郎

◆ 航君こうくんの置土産ありガラス戸にパツと開いた手形が残る
宮城県 廣谷 敬子

◆ 墓まぬりの人の行き交ふ寺小路の道をしめらせ秋の雨降る
岩手県 阿部 照子

◆ 自転車の前カゴのなかに座りみる幼の困つたやうなそのかは
福岡県 三吉 誠

◆ あの坊が菓子を持参で挨拶に初給料の連休帰宅
静岡県 末光 愛正

選者詠

芦ノ湖の湖上を霧は覆いゆきおおい尽くせぬ鳥居の
丹色
ちづ

【作歌小見】

今月は暑い夏場の投稿作にも拘らず秀歌が多く選歌に迷
いました。夏休みでお孫さんと触れ合う機会が多かったためか幼子
の表情を捉えて描く歌が散見しました。廣谷さん、三吉さん、どち
らも対象を良く見て詠い甘さを抑えています。